

# 津山の弥生土器 1 (壺形土器)

中山 俊紀

## 中期の壺形土器

美作の中期に属する壺形土器の基本的な種類は多くはない。長頸の壺が、頸部以上の形態的特徴により大きく3種に分かれる他、広口の壺1種、短頸の壺2種の合計5種類で基本的要素が構成されている。

長頸の壺3種は、基本的形態ともいるべき口縁端部を単純に拡張するもの（図1-1～3）、準基本的形態ともいるべき口縁端部を水平方向に拡張し上端面に凸帯あるいは凹線を巡らすもの（図1-4～7）、口縁端部を垂下させるもの（図1-8～9）とに区分可能で、それぞれA、B、Cと仮に呼ぶ。いづれも頸部に凸帯ないしは凹線文を基本的には巡らし、胴部上半を平行の櫛描文と波状櫛描文で交互に飾り、胴部下半を鎔磨きで仕上げる特徴は、基本的に共通する。時期的変化においても、凸帯文から凹線文へ、また凹線文の多条化・細線化・沈線化へ、あるいは胴中央部のよこ鎔磨きの省略化、円形浮文の浮沈など、3種ともども連続変化しており、中期末には一部装飾要素の欠落および模様の特化もみられるが、総じて個別種ごとの変異に乏しい。

3種の相違は、主として口縁部の形態の違いに基づくものであり、その相違は、Bにしばしば木蓋を固定するためとみられる紐孔が随伴するなど、機能差に解消できるものと理解できる。この見方が正しければ、A、B、C3種の長頸の壺は一連の極めて保守的な伝統のもとで作り続けられたもので、形態の相違は、機能に基づく差にすぎないということになる。

広口の壺も、基本形態は口縁部に連續圧痕あるいは連續きざみ目のつく複数の凸帯を巡らすもの（図1-10～12）1種である。貼付凸帯の凹線化を基本的流れとして変化するが、中期後葉前半に櫛描文で突然華やかに飾られたものが出現したのち、みかけられなくなる。

短頸の壺も基本的な形態（図1-13～15）は1種で、他に胴部が算盤玉のように屈曲する特徴をもつもの（図1-16～17）が少数ある。それぞれ仮にA、Bと呼ぶ。Bは、肩部分を原則として斜格子文で飾るが、斜格子文は当初細棒を束ねたような工具で描かれたものから、櫛描で鋭くきざまれたものへと変化する。中期末には、斜格子文が櫛描波状文他にとってかわられる個体が出現するが、胴部が鋭く屈曲する特異な器形自体は、後期にもちこされる。

これら壺のうち広口の壺がもっとも早く消滅し、中期末に長頸の壺B、Cが消滅するが、長頸の壺A、短頸の壺A、Bは後期に連続していく。

津山市域のみならず、美作全域をながめまわしても、壺形土器の構成に相違はみられない。

## 後期の壺形土器

後期の壺形土器には、中期から継続した種類のものとして長頸の壺A（図2-18～19）、短頸の壺A（図2-32～37）、短頸の壺B（図2-38）がある。しかし、それらは後期を通じ一貫して継起的に存続するものではなく、系譜的にもっとも持続性をもったとみられる短頸の壺Aですら、後期中葉に衰退してしまう。

それらと並存して、後期初頭から岡山南部の上東式系譜に含まれるとみられる長頸の壺（ラインD）や短頸の壺が出現する。当初それらは、搬入品ともみられるほどの類似性をもち、以降後期後葉までさまざまな変容を繰り返しつつ存続する。また東播ないしは畿内の土器の影響を強く受けたとみられる土器（ラインE）も後期初頭に出現し、この土器伝統は後期後葉にタタキ成形の土器として明確に認識で

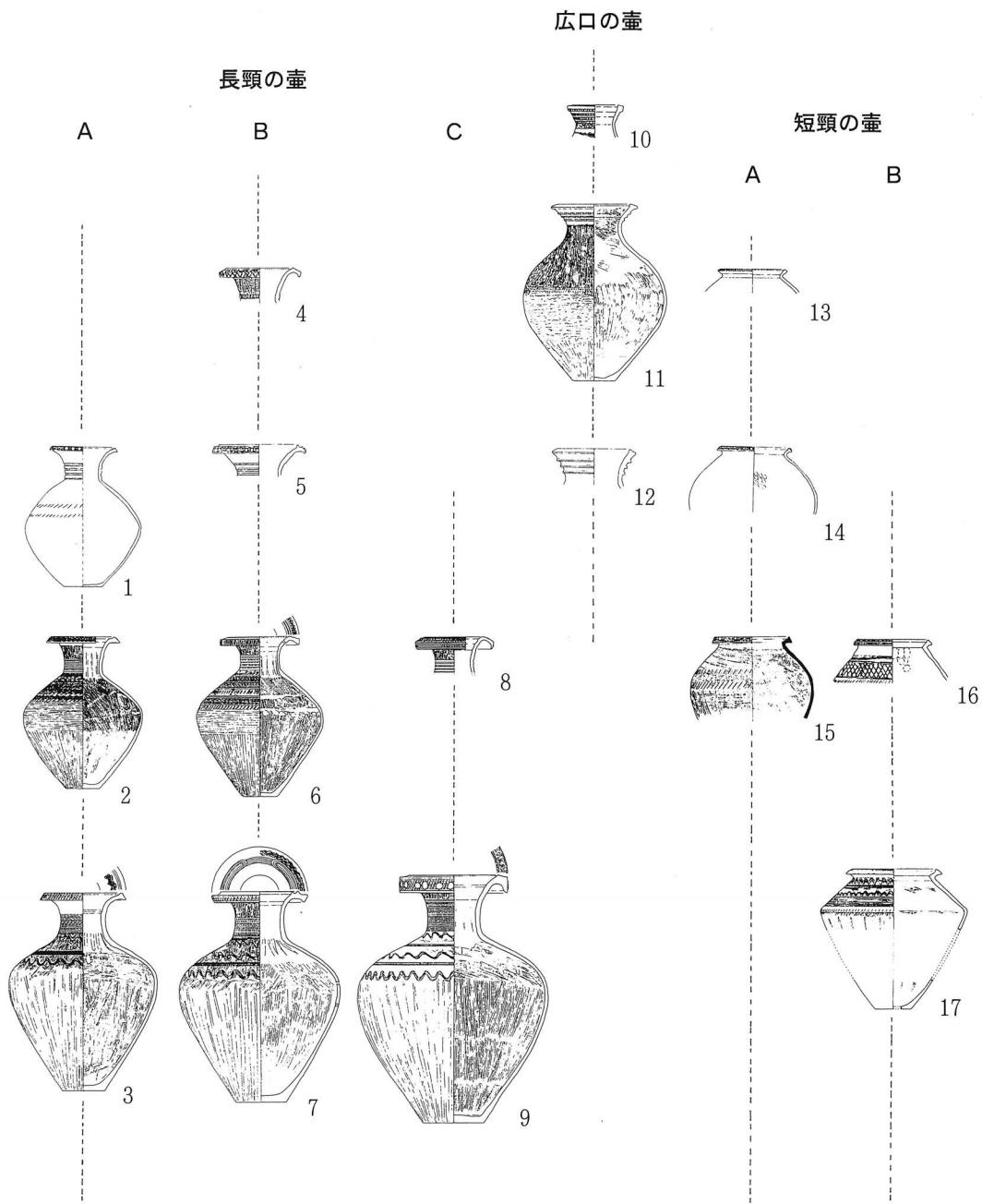
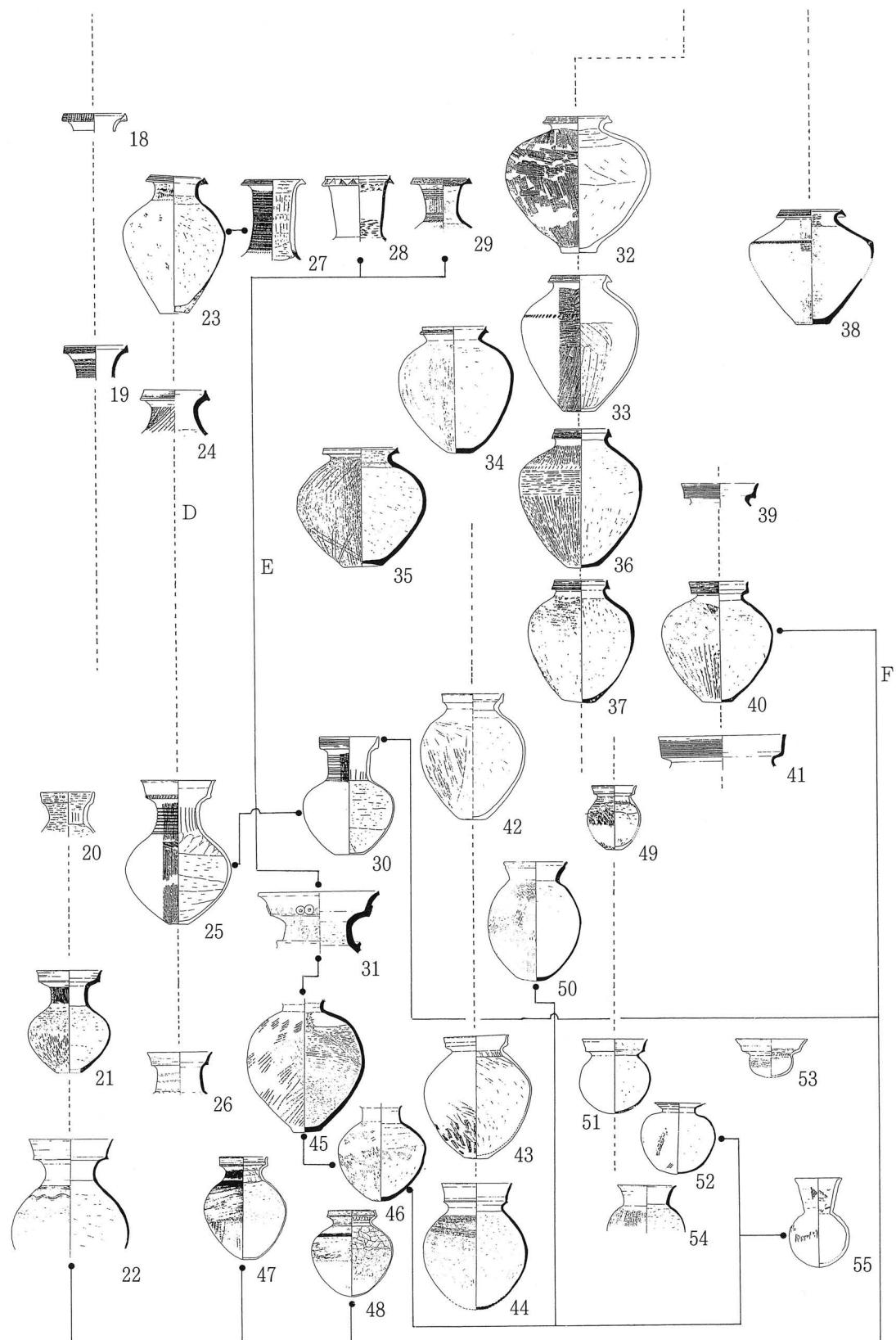


図1の上半は、中期中葉を、下半は中期後葉に位置づけられる。横の並びで示される土器相互の関係は、おおむね土器編年上の区分に一致している。

#### 土器出土遺跡

高本遺跡（1、5、12、14）、沼E遺跡（4、11、13、23、27）、高橋谷遺跡（10）、金井別所遺跡（2、6、8）、京免遺跡（15、18、19、21、24、35、36、37、38、39、40、55）、野田遺跡（16）、ビシャコ谷遺跡（3、7、9、17）、大田十二社遺跡（20、22、26、28、39、41、44、45、46、49、51、52、54）、竹田遺跡（43、53）、一貫東遺跡（29、31、32、34、50）、稼山遺跡（30）、二宮遺跡（47、48）、権現山遺跡（42）

図1 中期の弥生土器（壺） 縮尺約16分の1



\*図2の上端は後期初頭に相当し下端は後期終末を表す。各土器の位置はおおむねその間の相対的な新旧に対応しているが、横の線で位置づけられる土器相互の関係は必ずしも土器編年上の区分を示しているわけではない。

図2 後期弥生土器(壺) 縮尺約16分の1

きるようになる。

さらに、伯耆・出雲系譜とみられる土器（ラインF）が後期前葉後半から多く認められるようになる。この波を第1波とし、後期後葉にさらに第2波として伯耆・出雲系譜と考えられる土器群が多く発見されている。明確ではないが、この第1波の時期にはさらに備中北部に起源するのではないかとみられる特徴をもつ個体（図2-34）なども存在する。

後期の壺形土器を中期と対比しもっとも異なる特徴は、その形態の多様さにある。そしてそれは、上述のように土器伝統の起源地の多様さに起因するのみではなく、そのそれぞれの相互作用の結果生み出された変異・変容形の多さにある。

変異に富む後期土器の構成は、後期通有のものでもないことは、岡山南部平野の後期土器のありかたとくらべれば一目瞭然であり、地域特性の一つということができよう。

勿論、中期においても地域的土器が生み出されてくる前提に、多元的な土器起源の存在していたことは当然のことではあるが、地域的変化は先にみたとおり単純的、静的変化と評価できる。中期土器との比較でいうならば、後期の土器は、多元的、動的変化を示しているとみて誤りないであろう。

この中・後期の土器にあらわれた構造の変化は、当時の津山がおかれていた社会的条件に大きくかかわっていたことは疑いなく、後期の土器構造は、たんに周辺部の土器伝統の「影響」で説明しきれるものでもない。このことについては、次号以降で津山の弥生土器2（壺形土器・高壺形土器）、3（器台形土器）を検討したのち評価したい。

#### 掲載土器出典

「高本遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8 岡山県教育委員会 1975

「沼E遺跡II」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 津山市教育委員会 1981

「高橋谷遺跡」津山市教育委員会が1975～76年にかけて調査。報告書未刊。

「金井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集 津山市教育委員会 1988

「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 津山市教育委員会 1982

「野田遺跡」野田遺跡調査委員会 1984

「ビシャコ谷遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 津山市教育委員会 1984

「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 津山市教育委員会 1981

「竹田墳墓群」竹田遺跡は発掘調査報告第1集 鏡野町教育委員会 1984

「一貫東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集 津山市教育委員会 1992

「稼山遺跡I」久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979

「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28 岡山県教育委員会 1979

「権現山遺跡」津山市教育委員会が1976年に調査。報告書未刊。

なお、図2-42（権現山遺跡出土壺）及び55（京免遺跡出土壺）については、本項作成のため文化財センター野上恭子さんに実測をしていただいた。